

十点

③剃る髭は生きをるあかし暮の春

増田 守

毎日朝、髭剃りの鏡に向かう。その度に思うことは、大人の男の宿命である髭である。面倒な髭剃りの手間を省くと、直ぐに無精髭とからかわれる。納棺師の方の話ではないが、生命維持活動の余韻として、しばらくは髭が伸びるといふ。「生きる証」の髭剃りは実感である。

七点

①調律の執す一音あたたかし

恩田 才美

ピアノの調律を年二回、同じ調律師の方にお願ひしている。いつもながら、その仕事を彼が心から愛していることを実感していた。とろんとした春の昼、一音、又一音と真摯に取り組む人の姿に「あたたか」という季語が自然とついてきました。

六点

①菜の花の波オカリナの音のせて

藤本 友子

コロナ禍の自粛中、運動不足解消のため、追分市民の森の菜の花畑を散歩しました。一面、黄色に染まった風景は、沈みがちな気分を明るくしてくれました。また、畑の隅で、男性が演奏するオカリナのメロデーが春風にそよぐ菜の花にのって、どこまでも優しく包みこんでくれたのです。

五点

④命あるものは動きし初蛙

増田 守

命あるものの分け方に、原則としてただ一点を固守する植物と、自由に動き回る動物とがある。小さな庭ではあるが、その片隅に作った池の端に蛙が姿を見せた。蛙はもちろん動物である。その池の底には以前から蝌蚪の紐が光っていた。終活はともかく、少し不自由ながらもまだ移動できる作者も動物に属する。

①夫とめて言葉少なや草の餅

辻 幸子

夫婦二人の生活ですが、日頃から口数の少ない夫。ましてや外出のままならない日々では、話題もあまりなく、口数も少なくなるばかりです。そんなことを「草餅」と、取り合わせて句にしてみました。

四点

①春暁や清少納言もこの空を

桜井 幸枝

たまたま早くに目が覚めた。お勝手の出窓いっばいの空の何と美しかったこと。かすかにピンクがかつて。「春はあけぼの」これだと。美しさを言葉で表現するのは私は出来ない。ただ枕草子の出だし「春はあけぼのやうやう白く・・・」しか憶えていないが、凡そ千年余り前、時代も場所も全く異なる想像もつかない美しさだったろうと。習ったことはまるで忘れていても断片的には頭に残っているものですね。

①防護服尽きし病院花の冷え

古野 明美

報道画面の中に、これほど夥しい棺を見たのは、初めてである。地球上に、またひとつ、最強のウイルスが現われた。政府は、経済を優先し、武漢からの伝染病罹患者の入国禁止措置が遅れた。そして、ウイルスとの戦い

が始まった。程無くして、マスク、防護服、呼吸器などの医療物資が不足する病院が出て来た。報道された病院の中には、防護服が底を尽き、百金ショップの合羽で代用したり、或いは、ゴミ袋用のビニール袋を切って、ポンチョのようにして、代用されていた。この情景に、愕然としました。防護服がなくては、医師や医療スタッフは、ウイルスと戦える筈はありません。この国のリーダーの危機管理能力のなさ、緊急時の対応力の欠如に、落胆しての一句であります。

ゆつくりと杖に縋りて花吹雪

服部 直子

三月六日、早朝に転び、右足膝を骨折しました。今は、完治しています。しばらく杖をついて歩いて歩いた時の句です。

春の星コンビニまでは徒歩でゆく

弘友 秀夫

冬の間は寒くて、車で行っていたコンビニも、あたたかくなってきた、「コンビニぐらいなら星を見ながら歩いていこうか」という気持ちを句にしました。

春眠やつけばなしの「深夜便」

柏尾のり子

眠りが浅く、ラジオ深夜便を聴いている人はとても多いようです。実は、私自身は寝つきがいいのでそんな経験はありません。いつも聴いている友人が、春はぐっすり眠ってしまっ、つけっぱなしのラジオで朝目が覚めると言っていたのを聞いて句にしました。「深夜便」と「」でくくっていいものかどうか迷いつつ、使ってみました。

それぞれに定めがありて陽炎へる

藤崎安紀子

今年に入りすぐに我が家に思いもかけぬ悲しい出来事がおきました。その涙も乾かぬうちに、今度はコロナウイルス騒動が勃発。今も多くの人々がその犠牲になっています。何時、誰に、何がおこるか？ 本当に人の運命とはとらえどころのないものだと思つづく思ひます。そんな心情を句にしてみました。